一幕の雪夜　－Ｎｏｒｔｈ　Ｐｒｉｎｃｅｓ　ａｎｄ　Ｅａｓｔ　Ｃｒｏｗｎ－

神内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一幕の雪夜　－Ｎｏｒｔｈ　Ｐｒｉｎｃｅｓ　ａｎｄ　Ｅａｓｔ　Ｃｒｏｗｎ－

【Ｎコード】
Ｎ６６８９Ｘ

【作者名】
神内

【あらすじ】
純潔の女性による神聖政治の行われるガリアラ国では、「皇位継承者は婿を取るまで、男の姿を見てもその声を聞いても肉体に触れてもならぬ」という偏執的な戒めがあった。

しかし皇女サティスターシャは、かつて出会った少年のことが忘れられずにいた。その少年と再会したとき、国を揺るがすような出来事が勃発する。

サティスターシャ（1）（前書き）

クラインズを一時中断して書いたものです。同じ世界観ですが、単体の話として読んでいただければ嬉しいです。

なお、時系列はクラインズの後です。

サティスターシャ（1）

ガリアラの首都に位置する北界宮殿のヒイラギ離宮は、冬の日射しを浴びて白亜の大理石をにぶく輝かせていた。

といっても、差す陽光はほとんど灰色の雲にさえぎられ、とても弱々しいものだ。＜人造魔境＞という揶揄は、他の三大国と比べ人の出入りが少ない故の呼称だが、国内の状況を見てもまた＜魔境＞と呼ぶにふさわしい――二階に位置する自室の窓から「街」を眺めながら、わたしはそう思った。

「街」は宮殿に仕える使用人が住まう家の集まりであり、一応かたちだけだが集合住宅街としての体裁を保っている。宮殿敷地内にもうけられたそこだけを、この部屋の窓からのぞむことができる。

ガラス戸に手を当てると、ひやりとした。この向こうは、だが、この冷ややかさなど問題にならないくらいとげとげしい冷気に満ちていることだろう。

一方、室内に満ちる暖気は、整えられた暖炉によるものだ。ことに寒さに弱いわたしは、この部屋を出ること自体ほとんどない。ましてや宮殿の外へ足を運ぶことなど、今まで数えるほどしかなかった。

だからせめて、こうして眺める。どこか生気が抜けきった「街」の風景を。行き交う女性たちを。しかしこのひとつの「街」ですら、宮殿のある敷地のほんのスズメの額ほどしか占めていないと思うと、それもなんだかむなしくなる。

「我が国の都であるトートツスキーは四大国の中でも随一の規模を誇り、その巨大さは他の三国の比でははありません」

昨日の、首都機能と物流と納税の関係をとくとくと説いていた家庭教師の言葉が、ふと頭によぎった。

規模だけは、というのが正解だととっさに思った。なんせガリア

ラは国土そのものが、他の三大国よりも図抜けて広いのだ。頭でっかちな大陸の形状のため、最北の領土はそうなるのが当たり前であり、なにも特別なことではないからだ。
もちろん、口には出さなかったけれど。
しょせん十六の子どもの戯れ言でしかないから。

コンコン、と控えめに扉が打たれた。緩慢な動作で扉へと向き直り、応じる。
「はい」
「フィッポでございます。朝食をお持ちしました」
扉が開き、小間使いが配膳車を押して入ってきた。
「今朝の具合はいかがでしょうか、お嬢様」
「少し頭が重いけど、これくらいいつものことですから、平気です・・・・・」
言いつつ壁から背中を離したそばから足がもつれ、卓に強く手をついてしまう。慌てたようにフィッポが叫んだ。
「お嬢様！」
歩み寄り、肩を取る。
「ご気分が優れないのですか？　タツィアナ医師の回診を早めさせていただきます」
熱いタオルが差し出された。
「ありがとう・・・・・・暖炉のそばに置いてください」
指示にしたがったフィッポは、すぐに卓のそばへもどり朝食を並べ始める。健康面と味の面で、どちらも申し分のないように作られた王宮のお抱え料理人の渾身の作を、しかし愛でて喜べる気分でもなかった。
ああは言ったが、実際にどうやら体の感覚がおかしいことは気づいていた。床を踏んでいる感覚が希薄だ。なんだか頭のてっぺんがぼうっとしている。
体勢を立て直して、椅子に腰を下ろす。その足取りがふらついて

いたのだろう、さらにフィッポが口を開く。
「お風邪を召されたのでしょうか。なにしろ昨晩はずいぶんと冷えましたから。いずれにしろ急いでタツィアナ医師に来ていただきます」
「そうかもしれません。あまり食欲もありませんから・・・・・・」
ナプキンをかけられたことを、ぼんやりとする頭の向こうで確認すると、わたしは魚と豆の料理を匙ですくい、少量だけ口に運んだ。それを見ていたフィッポが、さきほどよりもやや落ち着きを取り戻した、いつもの淡々とした口調で告げた。
「やはりご朝食より回診を先にいたします。お嬢様、宜しいですか？」
「そうしましょうか・・・・・・・では、よろしくおねがいし、ます・・・・・・」
ぐらり、と頭が揺れるのを感じた。卓に手を置き、とっさにテーブルナプキンを握りしめる。動悸が速くなる。呼吸が荒い。料理皿の輪郭がぼやけ、かすみ出す。
「っ・・・・・・」
ガタン、という椅子の倒れる音と重なって、「お嬢様！」という小さな悲鳴があがった。

サティスターシャ（2）

「昨晩なにをなさっていましたか、サティスターシャ様」
寝台に眠るわたしをまじまじと見つめてくる、骨張った顔。お付きの家庭教師であるマリアは、三歳のときから付いている人で、見た目五十ほどだろうが、鼻眼鏡の奥の瞳はまだ溌剌とした――というたとえもどうかと思うけど――厳しさをのぞかせている。
診察を終えた医師が、家庭教師の隣に座っている。名前はタツィアナ。こちらも若い女だ。困ったような片えくぼを浮かべて、まぁまぁと傍らでなだめるような仕草をしている。
わたしが倒れたと聞いたとき、部屋に飛びこんできたのはタツィアナだけではなかった。小間使いのフィッポを従えて、この女家庭教師も無機質なコツコツという足音を打ち鳴らし入室してきたのだ。寝台に運ばれ、診察を終えるや、さきほどまでフィッポのいた場所に座り、しっかりと背筋を伸ばして問う。
「昨晩、なにをなさっていたのか。正直に、お答えください」
「すぐに寝ましたよ・・・・・・それがどうかいたしましたか？」
「本当のことをおっしゃってください。夜通し、一睡もせずに窓のところで過ごしていらっしゃった。――そうではないのですか？」
「・・・・・・・・・・・・」
やはりばれていたか、と熱に浮かされた頭で考える。
しかししかたない、なんせ毎年、この月のこの日に同じことをくりかえしていれば、さすがに察しがつくというものだ。二年前にも一度、露見している。ならばこの習慣と今朝の体調不良が、この老年の女教師の頭でむすびつけて考えられても、なんらおかしくない。
曖昧に頷くと、家庭教師は真一文字に唇を引き結んだまま、一度首を横に振った。
「お嬢様、二年前と同じことを申し上げなければならないことを、私は口惜しく思います。睡眠不足は短期的に見ても長期的に見ても、

お嬢様にとって決して利となることはありません。そもそも――」
説教が始まると容易に終わらないことは、よく知っている。見えないようにこっそりため息をつき、教師から目を逸らすように姿勢を変えるが、くどくどという声は耳に届いたままだ。途中まで聞いていたが、やがて不機嫌になりそうな顔をさとられぬよう、すっぽり枕に顔をうずめてしまった。
「お嬢様！　お話の最中にそのような態度は・・・・・・！」
「マリアさん。お嬢様はご気分が優れられないのですから・・・・・・」
半分冗談でも言うように、ほがらかにタツィアナが割って入る。名前を呼ばれた女教師の不機嫌な顔が、ありありと頭に浮かぶ。
「分かっております。しかしまたお嬢様がこのようなことをなさって、お風邪を召しては大変ではありませんか！　だからこそこうして口うるさいと思われようとも・・・・・・」
「でも、やっぱりここはお説教より静養が一番！　お嬢様も悪気があったわけではないでしょうし」
「・・・・・・分かりました、タツィアナ。医者としてのあなたの意見を尊重しましょう」
言葉が終わるや、椅子の引かれる音に続いてコツコツ、という硬い音。素早く扉が開く音が、家庭教師が退室したことを告げていた。
「私もこれで失礼いたします。タツィアナさんはお嬢様のそばにいらっしゃってください。なにかあったらすぐにお呼びください」
その後、ときを置かずして朝の仕事を終えたフィッポも、固く一礼して出て行った。去り際、ちらりと扉口を見ると、胸の前で右手を左肩へ当てるといういつもの所作をやってから、扉が閉まる。
暖炉の中で火が大きく爆ぜる音だけが室内に満ちた。

サティスターシャ（3）

「お～じょ～さ～ま～」
半ばおどすような色さえうかがえる声の主は、当然自分と部屋に残されたタツィアナ。緩慢な動作で枕から顔を上げ、仰向けになると、頭上にのぞき込むようにした小間使いの顔があった。
「いったいなんのことですか！　夜中に一晩中起きていたぁ！？」
すっかり素が出ているタツィアナがおかしくて、小さく苦笑をしてみせると、笑い事じゃありません！　という怒ったような返し。
「失礼・・・・・・でもたいしたことではありません。ちょっとした気まぐれです」
「気まぐれで一度やったことなら、マリアさんにバレるはずもないじゃないですか！　さては習慣的にやってましたね～？」
こうなるとごまかしもできないので、毛布を口元まで引き寄せて、せめて言葉を曖昧にしようと試みる。
「心配かけて申し訳ありません。もう下がっていいです」
「いいものですかっ。こうなったら今日は一晩中、見張っていますからね。ううん、三日くらいはつきっきりでそばを離れませんよ！」
顔を赤らめて鼻息荒く叫ぶタツィアナに、微笑みを禁じ得ない。自分の氷のような凍てついた心が、彼女と触れあうときだけは解けていく、そんな気がするのだ。
彼女との交わりは、お抱えの給仕として一年前から入ったフィッポよりも長い。なんせ生まれたときから、病弱なわたしを診てくれているのだ。人前では他人行儀しているが、二人だけとなるとつみもない雑談に花を咲かせることもしばしばだ。
「しかしなぜそんな夜中に？　・・・・・・星でもご覧になられていたのですか？」
「そんなところです。昨晩は・・・・・・」
だがわずかばかりに眼を細めて脳裏に臣描く夜空は、昨晩の空で

はない。三年前の夜空だ。
「・・・・・・星が、それは美しかったのですよ」
「そうでしたか。しかしやはりご無理はいけません。必ず夜は寝てください。そうしなくちゃ、今みたいに朝眠ることになってしまいますよ」
あっさりと飲み込んでくれたのは、正直ありがたかった。自分が嘘がうまいとは思わない。・・・・・・いや、決して嘘ではないのだが。
「あー、でもいいなぁ。お嬢様〜、わたしなんて最近星を見る間もなくてんてこ舞いなのですよ〜」
「ふふ・・・・・・でも、残念ながら出会えませんでした」
「なににですか？」
「わたしが本当に見たかった一番星ですよ」
指を組み合わせてこぼすと、少し心ここに在らずという様子になってしまったらしい。噂好きの女医師が目ざとく見とがめたように、
「お嬢様？　まさかとは思いますが、まさかどなたか殿方と・・・・・・？」
表情が、ややもすれば深刻そうなものだったので、つい身をかたくしてしまう。
「・・・・・・ありえませんよ。それ以上滅多なことは言わないよう。お願いします」
自然と応じる声も強張ってしまう。タツィアナも少し顔を暗くしたままだ。
「本当ですね。信じてますよお嬢様」
「信じるも信じないも・・・・・・そもそもそんな種がいることは、書でしか知らないのですから、会ったとしたら、興奮して卒倒する自信がありますよ。
でもタツィアナ。あなたは――殿方という者とお会いしたことはあるのですよね」
「それは、まぁー、人並みには」

「人並み？」
「あくまでも私は侍医ですから、高貴なお方と触れあうことがあるため、市井の者より制限はありますが、決して会う機会がないとはいえませんよ。お付き合いした人も、ま、まぁそれは幾人か」
「それは興味深いですね。しかし煮え切りません。少なくとも、殿方というのを知ってはいるのですね」
「い、いけませんよ！　いけません！　絶対にいけませんよ！　私はこれ以上、話しませんからね。むぐぐぐ」
なにを警戒したのか、いや、それは明らかだが――タツィアナが慌てて手をぶんぶんと振って、口に手を持って行く。
「殿方のことを知るのは、十八から・・・・・心得ています。それが王家に生を受けたときからの使命というものですから」
「ご理解してしているようなので、安心しましたが――そもそもこうしてお話していること自体、本当はいけないことなのですよ。マリア教師に知れたら、それだけでお説教ですから」
「そうですね、注意しましょう」
タツィアナの言葉が落ち着いたのを聞き届け、半身を起こす。安堵のため息とともに、なにげなく首を回して窓から下へと視線を向けた。ありえないと分かっていながら、視線は彼を捜していた。
もちろんいるはずはない。ここは「そういう場所」だ。殿方が存在しうる場所へ向けて、この窓もつけられていない。ここから見えるのは、森とその手前に広がる西の「街」だけだ。わたしが行く全ての場所の窓も、そういうつくりになっている。だから見えるはずもない。
けれど彼なら、ありえる。この敷地内が男の出入りが厳しく制限されているような場所であっても、彼なら飄々と入って、不敵な笑みを残して悠々と抜け出してしまうだろう。
彼は、そんな人だ。
たった一夜しか過ごせなかったけれど、それはよく知っているから。

リェイン（1）

雪こそ混じっていないが、超冷風が顔をたたく寒期の真っ只中。

しばらく続いていた無力感が、とうとう自分を死の手前まで追いやっている――防寒もせず、ただ北へ北へと歩いているのを意識した時点で、リェインはそう思った。

＜人造魔境＞の名にふさわしく、北へ北へと登るにつれて――つまり国境に接近するにつれて、配置されている怪物も超弩級と評すべきようなものに変わっていた。それらを丁寧に、一体一体屠≪ほふ≫っていく。意志はない。ただ本能が剣を振るわせるだけだ。死んだような目、操られたようなうつろな挙動が、そのことを暗に告げていた。

ただ木々が立ち並ぶだけの黒海原の寒期に、食べものなどあるはずがない。最後に食ったのは、なにかの肉だったと思う。あれはなんだっけ・・・・・・とぼんやりと考えながら、右手を超高速で動かし、飛びかかる四つ足どもを無意識に撃退していく。いっそ誰かがこの腕や首を食いちぎってくれないか。そうしたらこの鬱屈とした気分から放たれるに違いない。そんなことを、やはりどこか上の空で思いつつ、的確に急所だけを狙っている右腕が恨めしく思えた。

しかも幸か不幸か、葉の落ちた木々が空疎にならぶ森も、そろそろ途切れているようだった。黒海原でも‘半島’に匹敵するほどの難所さえクリアすれば、しばらく生命の危機もないだろう――その事実に、半ば安堵し半ばうんざりしながらリェインは森を出た。

さらに歩を進め、ガリアラの第十三関所に行き当たる。ちょうど東西の中間地点に位置する関で、首都までもっとも近い関所とされる。大国でいくつか犯罪めいたことはしたが、露見こそすれ顔は見られていないため、問題なく通ることができた。わずかばかりの関銭を置く。ここで金が尽きたが、どうでもよかった。

関所を越えて目に入ったのは、灰色の天だった。強い風が骨の髄まで凍らせていくようだった。久方ぶりの訪問の第一印象は、最悪だった。

一度肩を震わせ、浮浪者のごとき足取りでリェインは歩みなおした。草ひとつない寒々とした丘を越えてたどり着いた市街地は、これまたなんともいえぬ暗さがただよっていた。ねずみ色の防寒着に身をつつんで通りを行き交う市民の顔に、活気というものはなかったのだ。

「変わらねーな・・・・・・三年前と」

ぽつりと呟く。

「空腹より先に、寒さで死にそうだな。はは」

金もなく、宿もない。ほおっておけば路頭で行き倒れるだろう。寒期は商人、平民問わず貧しくなるこの国で、よけいなお荷物を拾う輩もおるまい。かたちばかりの施療院も、そこらの民家とたいして変わらない。

これでいい。野心は果てた。剣も折れた。最後になぜここに引き寄せられたかは皆目分からないが、それでもここはのたれ死ぬにはもってこいの国だ。

ゆっくりと指先をさわると、触れた感覚がなかった。肩と顎の震えが止まらない。だが今日という日が明けたら、全身は冷たく固まっているだろう。一歩、一歩。痩せこけた足を進める。ほとんど歩いているという自覚さえ失せている。

素足で石畳を進んでいると、唐突に背骨がくずれた。これまで支えていた最後の体力が、春の日射しをあびた淡雪のように、掻き消えた。

たえきれず、倒れ込みか細く息を続ける。周りを少ないながらも、人が歩み去っていく。ああ、死ぬな――と他人事のように思った。

「・・・・・・はは、ねーちゃんのこと、笑えねーよな、これじゃ・・・・・・」

いまわの際、黒海原で助けた少女の顔が頭をかすめ、そしてゆっ

くりと滲み消えていくにつれて、視界も徐々に狭まっていく。最後に見た二人の顔を、噛みしめるように思い起こしながら――。

「ありぃま大変じゃ。おにぃさん、しっかりしゃーさい」

ガタガタという車輪の音に続いたしゃがれ声に、沈む意識がゆっくりと引きずり出された。

リェイン（2）

「おにぃさん・・・（モゴモゴ）・・・正気かぁ・・・うちらでもそんな薄着じゃ往来を歩かれんのに・・・（モゴモゴ）・・・寒さに強いわけでもないよそモンが・・・そんな格好で・・・（モゴモゴ）」

御者台から、老婆の不明瞭な言葉が届いた。

後ろの荷車にぽつねんと収まっていたリェインは、これ以上待っていてはすべてのセリフを言い終わる前に日が暮れかねないと思って、先手を打った。

「いや、助かりました。どーも俺は昔っからそそっかしくてねぇ。今が一番北風がきつい時期だって忘れて、ちょいと宮殿見学でもしよっなー、なんて考えてたんですよ」

おそらく商品用として積まれた毛皮に身をくるんだまま言うと、

「そりゃ運がえぇ・・・（モゴモゴ）・・・見てのとおりあたしは商人で・・・（モゴモゴ）・・・ちょうど今、今年の遠地での仕事を終えて・・・（モゴモゴ）・・・あとはトートツスキーのに戻るだけ・・・（モゴモゴ）・・・なんじゃ」

「ここから都まではどのくらい？」

「なにぃ・・・（モゴモゴ）・・・そう遠くありゃせんよ。ほれ、ほんのすぐそこじゃ・・・（モゴモゴ）・・・おにぃさん、宮殿へ行きなさるのかね」

都市を抜けまた人気が皆無となった田舎道を、粘っこい口調を車輪の回る音だけが満たしていた。

「なんつーか、外から見れればいいかな、と？　そう思ったりするんですが」

「ふむ・・・（モゴモゴ）・・・寄り道するかぇ」

「え？」

馬がブルルル、とうなった。かと思うと、ちょうど行き当たって

いた十字路から馬車は右に折れた。そちらはゆるやかなカーブを描いて、また小さな裸木ばかりの林へと伸びている。
驚いて縮こまった背中を見上げると、それを察したのか、老婆も皺の走る小さな顔を半分こっちに向けて、
「こっちが、えぇ」
とだけ言った。なにがどういいのだろう。
その理由は、林を抜けたところですぐに悟ることとなった。荷車から顔をのぞかせたリェインの目に、遠目にだが、白く輝く球形のドームが目に入った。全貌がうかがえずとも、天頂部だけでそれを備える建築物の壮麗さ・巨大さが手に取るように分かる。
北界宮殿。王家その他、重要貴族の住まう広大な建物だった。久方ぶりに見たというのに、途方もない白妙の美しさに、思わず見ほれてしまう。
「うつくしじゃろ・・・（モゴモゴ）・・・せっかく見やすいとこ行ったんじゃ・・・（モゴモゴ）・・・よぉく目にやきつけておけ・・・（モゴモゴ）・・・」
リェインは半ば上の空のまま、短く嘆息した。
――まさか、またホントに見ることになるとはな・・・・・・。
「ところでにぃさん」
と鶏のような顔を、また老婆はこちらへ向けて窮屈そうに唇を動かした。
「その荷物はなんじゃ？」
視線は背中へ注がれている。我に返って、屈託なく笑ってみせた。
「はは、くだらねーものですよ。あんまり重くて背負うのもイヤにならぁ」
「ふむ・・・（モゴモゴ）・・・なら、荷車に置いとくがえぇ・・・（モゴモゴ）」
短く言って、老婆はまた顔を前方へ戻した。
同じくそちらへ眼差しを向ければ、ガリアラの首都トートツスキーを覆う高い街壁がゆっくりと近づいてきた。

リェイン（3）

都市に入ると、いっそう宮殿の存在感は増してくる。トートツスキー自体がほかの三国と比して巨大な都だというのに、宮殿のある敷地はその二割も占めるというから驚きだ。もっとも三年前、宮殿に忍びこむために調べた情報であるため、若干の変化があるかもしれないが。

といっても、こちらは北界宮殿、『業界用語』でいう＜女宮＞であり、貴族、とくに王族の女人の住まう宮殿だ。ここからは遠すぎてほとんど見えないが、これとちょうど反対側にあるのが、正式名は忘れたが通称＜男宮＞。文字どおり、貴族の男が群れ集う宮殿であり、こちらも本宮ではないにしても立派なものらしい。

そうこうするうちにも、馬車は進む。いくつかの道をさらに右へ右へと曲がり、ついに見上げるような高さの外壁に沿った道へと入った。こちらはこちらで家屋はなく、全身を冬装備で武装した騎士たちが闊歩している。遠くへ目を向けると、塔形の物見櫓を付属させた城門のようなものがうかがえる。

少しだけ懐かしかった。

潜入した際に使ったのはこちらの小門で、どうやら小間使いや御用商人などの搬入口として機能している門扉らしい。これの数倍はあるという本門はここから真っ直ぐ行って右折し、さらにずっと進んだところにある。

「巨人族の住処かよ。今のローウェンで造ったら都市民につるし上げられそうだな」

ぼんやりと独りごちたとき、老婆がしなびた顔をこちらに向けた。

「下りぃ」

「は？」

「・・・（モゴモゴ）・・・都合がわるい」

なんのことか、と思ったがどうもさっきから通りを歩く騎士たち

がうさんくさそうにこちらを見ていたのだ。なるほど、やはり男という種の扱いが独特だな、と思いつつ納得して馬車を降りる。
だが、どうやらただ周りの兵の視線が集まるのが不快だ、という話ではなさそうだった。「待っとれ」
言うなり、少し速度をあげて馬車が進む。遙か彼方にあるうずたかい城門の前で止まる。
「おい――って、えぇ？」
なにかを門脇の騎士に掲げたかと思うと、兵が馬車の積み荷を確認するような仕草をして、あっさりと城門を通した。
慌てて走法で後を追うと、閉じた城門にいたる前に兵によって制止された。しかたなく壁に沿って引き下がり、じっと待つことにした。

ふたたび聞き覚えのある車輪の音が聞こえてきたのは、それからずいぶん経ってのことだった。振り返ると、また門兵が、直後に内から出てきた馬車に対して城門を開いていた。
呆然と見守る中、馬車はやや加速気味にこちらへやってきて、ぴったりと真横で止まった。
「乗れぃ」
「あ、あんた・・・・・・」飛び乗りながら、「商人って御用かよ」
「違う・・・（モゴモゴ）・・・そうかもしれん・・・（モゴモゴ）・・・街への供給が主じゃからの・・・（モゴモゴ）・・・」
毛皮はすべてなくなっていた。こりゃずいぶん寒々したなと思いながら、中央に飛び乗りながら聞き返すと、
「街は使用人の詰め所じゃ・・・（モゴモゴ）・・・使用人の」
「ってことは女しかいないんだなー。へー、そりゃハーレムだ。王族の女に手出すよりよっぽど安全だぁ」
「余計なこと考えるな・・・（モゴモゴ）・・・小童でも越えりゃ・・・（モゴモゴ）・・・容赦ないぞ」
「心に留めておくよ」

軽々に応じると、細い顔がまたこちらを顧みた。皺にうずまった瞳が、少しだけ細められる。
「商会の信用に関わるもんじゃ・・・（モゴモゴ）・・・下働きとはいえ、うちが雇うもんには変わらんわけじゃからの・・・（モゴモゴ）・・・問題起こしたらハチミツの納入にも差し障る」
「ああ、まーそりゃそーかもしれねぇけど・・・・・・って、今なんつった？　え、雇う？」
ふたたび老婆の顔が、半分だけこちらを見た。
「にぃさんや・・・（モゴモゴ）・・・恩を仇で返すような真似せんじゃろ・・・（モゴモゴ）・・・老い先短い婆ァひとりで寒期の力仕事やらせる気かぃ。
ほれ、商会はそこじゃ。支度をせぃ」

サティスターシャ（4）

暖炉のパチパチという音が耳に届くなか、寝台からクビを出して窓を見やっていた。

昼間だというのに、やっぱり空は鈍色。ここから望む景色は、たいがいが灰色に包まれていた。

こうして見ると、やっぱり窓の外の世界は、なんだか現実感が希薄で――。

勉強と晩餐の時間以外、こまごまとした「雑務」を除けばまず部屋を出ないわたしにとって、この部屋こそ逆に現実だった。

けれども、ちょうど三年前、その現実はわずかの間だったけど、反転した。わたしは生まれて初めて、外に出たい、外の世界や外の人たちに触れたいという強い欲求にかられた。三年が経った今でも、この時期――フィーレ祭の前後の期間になると、またあの少年が冬の精のごとく、ひっそりとやってきてくれるのではないか、という淡い幻想を捨てきれなかった。

窓から目を戻し、白い天井を見つめていると、あの夜のことがゆっくりと脳裏によみがえってきた。

フェオ7日の夜。

やはり今と同じように寒期の真っ盛りのことだ。暖炉の火が点されていて、部屋は少しむし暑いくらいだったが、体を貫くぞわぞわとした悪寒は一向に消え去りそうになかった。

わたしはそのとき、重い風邪を引いていたので、数日は寝台にこもりきりだったのを覚えている。咳はなかなか止まらず、頭の朦朧としていた。

部屋にこもることは慣れているが、さすがに五日近く部屋から一歩も出ないということは初めてだったので、三日目くらいからもやもやと倦怠感が胸にただよっていた。

しかし勝手に出て、見つかったら夜中であろうとなんであろうと女教師が飛んでくるだろうし、見つからなくても容態は悪化するだけだろう。

「ケホ、ケホケホッ」

口元を押さえ、こみ上げてくる嘔吐にも近い不快感をこらえながら咳を出す。

絶え間ないしわぶきのため、喉がジクジクとうずく。このせいで、実はここ数夜満足に眠れていない。これだったら、小間使いがいようといまいと変わらない。

ぽすんと枕に頭を置いて、大きく息をつく。なぜかいつも以上に胸が苦しかった。呼吸も荒れ気味だ。タツィアナからもらった薬はちゃんと夕食後に飲んだ。しかし効きが悪いのだろうか。

「・・・・・・あたま、痛い・・・・・・・」

のろのろと手を動かし、頭に載る濡れ布の位置を少しずらす。そろそろ火照ってきたから変えてもらいたいのだが・・・・・・そんなことで紐を引くのも躊躇われた。実際、ここ三日は何度もタオルを変えてもらおうと思っては、引くのを何度もためらっていたた。

「眠たいけど、眠れません・・・・・・」

こぼし、仕方なく上半身を起こすと布がぽてっと厚いブランケットに落ちる。

ゆるゆると頭を振って、むっくりと体を起こす。こうなったら少しつらいが寝にくい姿勢をして、体に負荷をかけて眠気をもたげさせよう、と思いながらブランケットをほとんど生気のない目で見下ろしていると。

コンコン、と――。

軽い音がした。

扉を叩いた音ではない。ガラス戸の方だ。

振り向いたその先に、窓に貼りつく影を見て、あやうく悲鳴をあげかけた。

めずらしく雲間からのぞく月の光を背にして、人がいたのだ。

顔面は目以外が布で覆われている。小柄だ。たぶん自分と同じか、へたすればそれより下だろう。
ただでさえ早鐘を打つような脈が、さらに昂ぶる。もともと好奇心は人一倍強いわたしは、バレたら大変なことになると知りながらも、興奮に取り憑かれて、寝台から離れると窓辺へ近寄っていた。いろいろと物事を知ってしまった今なら、絶対に紐を引いているだろう。
その人はもう一度、窓を指でつついた。なにかに魅入られたがごとく、心ここに在らずといった気持ちで鍵を引き開けると、窓枠に張りつくようにしていたその人物は、当然のようにするりと入ってきた。
音もなく。
――影みたいだ。
どんな女の子だろう、いたずら好きの子なんだろうな、とわたしはわくわくして尋ねた。この時点で、もちろん相手が自分と同年齢くらいの娘と信じて疑わなかった。
「お顔を見せてくださいませんか？」
くらくらすら頭のこともしばし忘れて、わたしは尋ねた。
だが、その子が覆面を解くと、好奇の目は一気に驚愕の眼差しと変わった。
布地の裏から現れた顔は、明らかに「見たことがない」ものだったのだ。
見つめること、数瞬。
ようやく目の前の子どもがソレであると悟ったとき、なにをすべきか分からなかった。目を閉じて息をとめ、全速力で部屋を飛び出すべきなのか。むりにでも追い出そうとするべきなのか。ただその場で呆然と立ち尽くすべきなのか。
混乱した頭が導き出したのは、ともかく人を呼ぼうという考えだった。紐の存在なと思いいたらず、ただありったけの悲鳴をあげかけ――しかしすぐに手が口をふさいだ。

「キャアアアア・・・・・・んー！」
殿方に会ってはならない、触れてはいけない、見てはいけない、声を聞いてもいけない。生まれて以来、ずっと胸に刻まれてきた教えが、無に帰した瞬間だった。
「うわっ、静かに静かに。説得力ないかもしんないけど、あやしいヤツじゃないからさ」
「むーむー、むううううう！」
もう駄目だ、死ぬんだ、絶対の禁忌を犯してしまったわたしは死んじゃうんだ、と錯乱していると、廊下でやや騒がしい足音が聞こえてきた。巡回の兵士が聞きつけたのだろう。
バレたら殺される――そんな根拠のない思いに駆られていたわたしは、自分と同じくらいの少年を寝台の陰に押し倒し、自分でも信じられない機敏さで寝台に飛び乗り毛布にくるまった。
「失礼致します」
という女声に続き、扉が開いた。
「どうしたのですか？」
せいいっぱい、眠たげに目をパチパチさせてとぼけてみせると、蝋の炬火を持った兵は不思議そうに、
「お声が聞こえました故。いかがなさいましたか、お嬢様」
「声・・・・・・ですか？　申し訳ありませんが、記憶にありません。寝ぼけていたのでしょう・・・・・下がっていいです」
兵士はなおも小首を傾げていたが、すぐに部屋を後にした。
靴音が遠ざかり、またあたりに静けさが戻ってから身を起こし、おそるおそると左手の物陰をのぞき込んでみると、少年の姿は消えていた。
「ええ！？」
「こっちこっち」
ぽんと肩を叩かれ、振り返るといたずらっ子のように微笑む少年の顔がそこにあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6689x/

一幕の雪夜　－Ｎｏｒｔｈ　Ｐｒｉｎｃｅｓ　ａｎｄ　Ｅａｓｔ　Ｃｒｏｗｎ

2011年11月8日03時11分発行